

◆テーマ：社会を変える建築プロジェクト

◆氏名：ソニア・ディロン・マーティー（ディロン・マーティー財団）

◆プロフィール：

Sonia Dhillon-Marty。インド生まれ。インドで美術を学び、アメリカで MBA 取得。アメリカ国籍を持ち、2003 年より日本在住。

◆本文

昨年から自らの名前を冠した財団」を創設し、アーティストや建築家の力を借りて、芸術や建築プロジェクトを通して社会にメッセージを発信する活動を始めた。

私の生まれたインドでは、農業が疲弊しているし、女性の社会的地位の向上や権利の拡張も急務だ。そんな世界の現実を変えるため何かできないかと構想したのが発端である。活動のテーマは、「共感呼び起こす建築によって持続的な平等社会をつくり上げていくこと」「文化交流を通じ、豊かな社会の実現を目指すこと」。そこでの私の役割は、アートイベントやワークショップなどをオーガナイズすること。私自身がインドでアートを学び、アメリカでビジネスを修め、大手企業でファイナンスの仕事に関わったので、ものづくりとビジネスの両面から構想力と人脈を生かしてプロジェクトを立案し実行していく。

例えば、東京でも建築家らとのつながりを得たので、日米の建築家と学生を集めて、米スタンフォード大学で建築ワークショップを実施した（本連載 13 年 1 月号の玉上貴人氏の稿参照）。「人々に平等を実現し、人生を豊かにする」というテーマで、建材開発、エネルギー問題、水資源問題などを視野に入れながら、設計コンペを行い討議した。

やりたいテーマは他にもある。インドでは女性に対する差別が色濃く残っているので、例えば、注目度の高いファッションショーを渋谷の街で突発的に開催し、「女性の服装を制限するのではなく、暴力を防ぐべき」というメッセージを描いたオリジナル T シャツをモデルが着て、女性の人権を世界に訴える。そんなイベントも構想中だ。

今年 10 月には、「Contribute（貢献）」などをテーマに、1 週間のイベントを行う。アメリカ、メキシコ、ギリシャなどから建築家を招聘し、遷宮を迎える伊勢神宮を訪れ、宮城現雄勝市でデザインワークショップを行い、東京大学でシンポジウムを開催する。そして非常に日本人の持つ感受性や謙虚さに共感するので、今後も世界の人々とそれをシェアしていきたいと思っている。